

第 11 回佐世保市子ども・子育て会議 議事録（要約版）

日時：平成 29 年 6 月 27 日（火） 19 時～ 21 時 15 分

場所：すこやかプラザ 8 階 講堂

質問・意見等	事務局回答・今後の方針など
議事（１）「佐世保市子ども・子育て支援事業計画」に関する中間見直しについて	
（子育て短期支援事業（ショートステイ）について） - 本市では保護者が自衛隊員で出航中、親戚も近くにいない時に、子どものきょうだいが入院することになった場合、もう一方の子をどうするかという問題が生じると思う。 その場合に、本事業があることを周知すれば、実績値よりも利用数が伸びることも期待でき、見直しの必要が生じる場合もあるのでは。 （病児保育事業について） - 平成 27 年度の利用見込みは 5,730 人だったのに対し、実績は 3,049 人。 （事業を受託している小児科として）一見余っているが、病気の流行によって変動が大きく、数値上足りているようで足りていないという実情を汲んでいただきたい。 また、可能であれば、瞬間的に手が足りない状態を改善できればと考えるため、行政としても、その点について考えていただきたい。 （教育・保育の量の見込みについて） - 陸上自衛隊の水陸機動団設置は決定されたことか。 決定された中で子どもを預ける 1 号・2 号・3 号の人数はどのくらい見込んでこの数字になるのか。 - 推計では水陸機動団の言葉が書かれているが具体的な数値が示されていないため、その分でどの程度見込むのか分かりづらい。	〔子ども保健課長〕 - きょうだいのうち一人が入院する時に、その子どもさんの預かり先がなければ申込可能。広報については、知らない方に対して働きかける必要がある一方、過度に広報すると、適正でない利用がされる懸念があるため、留意する必要もある。 〔子ども支援課長〕 - 数値的には余裕があるように見えるが実際はそうではない、このような病児保育をどうしていくのかというのは重たい課題として受け止めている。 どういった体制で受け入れればカバーできるのか、ご意見を頂きながら検討したい。 また、議会からも、地域的な問題に関するご意見をいただいているため、それも合わせて検討したい。 〔子ども支援課長〕 - 決定していると聞く。 乳幼児数の増減については、今後の動きであり推計である。 数千人単位で水陸機動団が増えると聞くので、年々増えてくることを考えても、数十人と言わない程度でお子さんが増えるのではないかと見込む。 - 量の見込みを立てるにあたっては、いくつかの要素がある中で、水陸機動団の要素として、一定の量を見込んでいる。

質問・意見等	事務局回答・今後の方針など
現実にこの数値を把握することは難しいと思うし、数値が変わる可能性もあると受け止めるが、どの程度見込んで数値を入れているのか。 1号認定と、3号認定のうち0歳児の実績値が100パーセントを超えている。 特に1号認定の見込みについて、通減傾向とのことだが、実績が現に100パーセントを超えているのはいかがか。 新制度に移行したために、1号認定を希望する子どもが3歳で入ろうとしても入りきれない、といった話を現に聞くが、そのフォローは？ (放課後児童クラブについて) - 安心・安全な学校内余裕教室の活用を教育委員会と連携して具体的に取り組めないか。 長崎市ではほとんどが学校内設置と聞く。 より安全な場所にクラブを開設してほしいが、特に夏休みだけでも開設ができないか。 (障がい・発達が気になる子どもについて) - 障がい児は別枠にて見込みに計上されるのか。 障がい児の預かりは負担を伴うため、保護者にとって預け先が見つからない。 障がい児は1人枠として計上するのは無理なので、入れない場合は何人分でカウントするか、待機といった対応も必要と思う。 (教育・保育施設としては) 子ども発達センターの医師が頼り。 支援を要する子は増えており、発達が少し気になるという程度の子は、健常児との違いが少なく一概には言いづらい。	もう一点、3号認定児の入所率が年々上がっており、子どもの数自体は減っているが、入所年齢が年々低下している傾向にあり、その部分での見込みもある。 今回の見込みは、両要素のトータルであり、水陸機動団で何人増えるかまで算出しているものではない。 1号認定については100パーセント、平成27・28年度の実績は増えていて、29年度以降については通減傾向にあり、確かに29～31年度については減少している形。 ただ、当初の見込みと比較して100人程度増を見込んでいます。 どうフォローするかは現在検討中。 [子ども育成課長] - クラブの実施場所確保は課題であるが、現在、余裕教室活用型が市内62か所のうち1か所、ほか、学校の敷地内に専用の施設を建てて実施しているのが10か所に留まり、他市に比べて進んでいない。 ご指摘のとおり、余裕教室活用を検討する必要があると思っており、教育委員会とも正式な場を設けて検討したい。 [子ども支援課長] - 基本的には計上されるが、障がい児を預かる場合は保育士を加配する必要があり、その代り一定数以上の子どもを預かる場合、加配に係る保育士の給与のうち一定額が助成される。 [子ども未来部副理事(発達センター所長)] - 保育士や教員から、少し気になるという程度の子どもの診てほしいと言われることがある。 発達障害の診断に該当するのは7%ほどと言われており、その他、不適切養育などで、

質問・意見等	事務局回答・今後の方針など
ようやく、支援を要する子への関心が向き始めた。 ・ 保育施設でも、障がい児は年々増えており、各クラス 3,4 名は必ずいるが、職員が 1,2 人配置というのは厳しい。 職員一人雇うのにも手薄な状況が実情。 障がいを抱える子どもの入所が年々若年化している。 やっと去年から 3 歳以上が障がいの補助の対象になったが、0 歳児から見え始めている。 保育士は現場で非常に苦勞していることをご理解いただきたい。 (地域子育て支援拠点事業について) ・ もともと 8,800 人の見込みが立てられていたが、今回の見直しで 10,000 人に修正することだが、10,000 人の見込みに対する対応策を教えてほしいというのと、28 年度で事業終了した 1 か所について、利用実績が全体の 4 % くらいとのことだが、事業終了したセンターの分にどう対応するのか。	発達障害に見える事象もある。 重い障がいを持つ子どもは、すぎのこ園という児童発達支援センターに入るが、定員 30 人目いっぱい、入園希望も先日あったが、入れない状況。 そういう状況の中で、本市独自のプラスアルファとして、子ども保健課が実施している 5 歳児発達健診の充実を、今後の動きとして取り組めたらと思う。 [子ども支援課長] ・ 8,800 人の見込みを実績が大きく超えたのは、子ども発達センターが三ヶ町アーケード内に移転し、利用実績が大きく伸びたことが主要因。 事業終了した私立保育所 1 か所は、28 年度利用実績で年間延べ約 4,000 人、平均 4%。今後その分をどうカバーするかについては、当該施設周辺にある別の地域子育て支援センターへ通っているという話を聞くため、大きな影響はないと見込んでいる。 ・ 地域子育て支援センターは主に在宅の子どもを支援する形となっている一方、いわば保育園・幼稚園に通う感覚で、リピーターが増えている、同じ方が何度も通われているケースが多いという話を聞く。 これをどう捉え、地域の中で支援していくのかについて、委員の見解も踏まえながら検討していく。 今回の中間見直しでは、10 か所で保つとしつつ、並行して地域の中での支援のあり方を検討していく。 [子ども保健課長] ・ 保健師は地域性を重視し、地域子育て支援センターに保健師を月 1 回派遣する事業を

質問・意見等	事務局回答・今後の方針など
(質的向上について) 子育てサポーターについても、質を上げることが重要と思う。 自分も子育てサポーター養成講座を受講したが、フォローアップ講座を受けた人たちもフォローアップを定期的に行っていないといけない、スキルアップ講座などをお願いしたい。	始めた。 それ以外にも、子育てサポーターが Web サイトの支援ということでボランティアを清水地区公民館でされており、好評である。 そこにも保健師を派遣しているが、その方がボランティアで、減る場所のところで自分で工夫をされてその支援を始めておられて、他の支援センターと同じくらい人が集まっている。 そこにも保健師を派遣し、「ままんち させぼ」の助産師も派遣するよう考えている。 支援センターの利用者は低年齢化しているため、そういった子どもの母親、妊婦にも依頼をし、妊婦さんも行ける場にして地域の中で妊娠中から子どもに慣れ親しんでいただいて、産後も支援センターなど地域の身近なところに行って相談をするという体制を整えて行きたいと思っており、子ども保健課ではそういったところを格差なく回って支援していきたい。 〔子ども保健課長〕 子育てサポーターに関しては、フォローアップ事業として研修会を年 2 回ほど、講師を選び実施している。 また、サポーターで力がついた方は、家庭訪問員として全戸訪問の訪問員を務める。 月 1 回、必ず訪問員同士で集まり、保健師の指導のもと、これで良かったのかとか、こういう質問があったなど、ロールプレイ等を通じて学びの場としている。また、同伴訪問等をして互いに評価するなど、スキルアップに努めている。 訪問員が 15 名おり、その中で更にスキルアップをされた方が養育支援訪問員であり、5 名いる。 母親が発達障がいや精神疾患、ネグレクトで子育ての仕方がわからないなどのケースに

質問・意見等	事務局回答・今後の方針など
(障害がある子どもについて) ・ 自分の時代には児童全員保育園にいれなければならないという発想がなかったですし、幼稚園は経済上の都合で入れない場合もあった。一方、現在、障がいを持っている子どもが増えたのはなぜなんだろう。 ・ (教育・保育施設として) 障がいを抱えても保育園・幼稚園に預けたいという保護者のニーズが増えてきたと思う。そして子育てが社会化されたという社会性も交えて、そういうのが増えてきたと感じる。	ついて、必ず皆で検討し、その家庭に入り、家事や育児の仕方を恩着せがましくなく背中 中で温かく包みながら伝え、なるべく褒めながら、自己肯定感を感じてもらおうよう努めており、訪問員のスキルもどんどん上がっているところ。 ・ 医療機関や専門家にも限りがあるため、幼稚園・保育園や学校で研修を実施したり、子ども保健課で発達健診や 5 歳児相談をしており、子ども発達センターに行く必要まではないが、5 歳児相談や保育所への状況報告を促しているが、グレーゾーンの方はデリケートに捉えるため、工夫して、「小学生に上がつてうまく生活を送っていくためには、たとえば先生も相談を受けたり専門的な相談を受けたり、楽しく学校生活を送りましょう」といった伝え方で、発達障がいあまり表に出さず、苦手な部分を伸ばしていきましょうというように、母親達に配慮・工夫しながら、苦手なところのために工夫してくださいと促している。 今後も子ども発達センターの職員が出向き、それらの方々への支援の仕方を話し、スキルアップを一緒に行っていこうと取り組んでいる。 [子ども未来部副理事（発達センター所長）] ・ イメージで言うと、ストライクゾーンが狭くなったというか、従来だったらもう少しストライクゾーンが広がったが、そこが狭くなると、グレーゾーンの子どもの発達障害として認められるようになっている傾向にあるのではないかな。 もう一つは母親を支えるキーパーソンが少ない家庭がすごく増えている。 孤立に近い、あるいは自分たちだけで頑張らなくてはいけない家族が増えているのではないかと、臨床の経験でも感じる。

質問・意見等	事務局回答・今後の方針など
	保育園など、望ましい環境に早く入れてあげること、情緒や行動の問題が改善される場合もある。
○その他意見交換	
(感想) ・ 色々な立場の委員が、子育てについて色々なことを話し合われていることを知り、子育てする世代として、とても頼もしく思え、勉強にもなった。 自分の息子は子育て環境にとっても恵まれていて、保育園にも学童にも待機せずに入ることができた。 待機で入れない子どもがいないよう、今後も環境を整えていただきたいと思う。 自分自身も子育てに関わりながら、子育て支援にも携わりながら今後も手伝っていけたらと思う。 ・ 自分は里親として、不適切な養育、虐待、そこまでは至らなかったケースについて、どういかならなかったのかなと思うことが多々ある。 この子どもはどういう気持ちで生活していたのか、どういう空気を吸っていたのかと思うことがある。	